

# 通信小海

## 極北の地で

牧師 水草修治



「最初カナダ北部に行ったところには、氷点下四十度とか五十度まで下がりましたが、今では氷点下三十度がせいぜいです。」先月猛暑の横浜で、カナダ北部の極北の先住民に宣教師として働いている鈴木紀子宣教師と話をする機会に恵まれた。鈴木師が第一期の宣教に立たれたのは1977年であるから、三十年たつことになるが、この間、地球の温暖化がいかにすさまじい勢いで進んだかがわかる。

「最近シロクマが、村里に残飯をあさりにくるようになりました。シロクマが主食のアザラシを捕るときに必要な流水が来なく

「今月の御言葉」  
 「だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」ルカ福音書十八章十四節

なってしまうからです。」という。シロクマは通常アザラシが休憩のために浮上してくる流水上に待ち伏せ、浮上したところをあつ鋭い爪で引っ掛けて怪力で引き上げる猟法なので、狩りの足場となる氷がなければ、アザラシを仕留める事ができない。結果、飢えたシロクマは人間の残飯をあさりに村里にやって来る。シロクマは立ち上がると最大340センチにもなる最強の巨獣だが、今や食糧不足で小型化し、絶滅危惧種に指定されてしまっている。

信州にいと、地球が温暖化すれば、少しは冬場の寒さもしのぎやすくなるかな、などと安易に考えそうだが、現実はその簡単なことではない。

温暖化によって流水が来なくなったため、アリューシャン列島のシシユマレフという島の住民たちは全員島を棄てて移住をしなければならなくなった。かつては流水が冬場

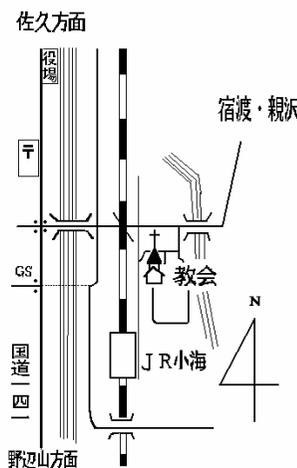
日本同盟基督教団小海キリスト教会 牧師 水草修治

会堂・牧師館 南佐久郡小海町大字小海四三三五 二七

千三八四一一二 二六七九二四七七六

千振替00530061683

## 見晴台の教会へどうぞ



## 集会あんない

日曜日 朝礼拝 午前十時から十一時半

夕礼拝 午後八時から九時

\*海尻・川上・南相木で毎月家庭集会あり。

\*個人的な聖書勉強や個人的なご相談にも乗ります。

の激しい波による島の侵食を防いでくれていたが、温暖化によって流水がなくなり島は波に浸食されて、家々がつぎつぎに島の端から海にのみこまれ、もはや安全には暮らすことができなくなったのである。

また、南洋の諸島などでは海水位が年々上がって、砂浜が侵食され、椰子の木がばたばたと倒れている。移住も時間の問題である。コップの氷が溶けてもコップの水があふれないように、極地の海面に浮かぶ流氷が溶けても水位は上がらないが、近年は、グリーンランドや南極など陸の大規模な氷河が溶けて海に崩れ落ちているために、水位が上昇しているのである。

それにしても莫大なエネルギーを消費して温暖化の原因を作っている米国・欧州・中国そして日本のような国々の民ではなく、エネルギー消費の少ない極北や南洋の人々が、被害を受けているという現実には、なんとということが。他人事のように思ってしまうが、実は便利で快適な生活をすすめる先進国の私たちが自分の都合のために、他国の人々の国土を奪い取って難民化させているのである。

私たちは先祖以来住み慣れてきた、この日本列島がなくなつて、自分が難民になるというたことを現実のこととして考えたことがあるだろうか。巨大地震が引き起こす「原発震災」の可能性を考えれば、それほど非現実的な話ではないのだが。

エネルギー大量排出国の私たちが、これを他人事として手をこまねいているならば、神がお許しにはなるまい。いろいろな面で、地球環境問題にまじめに緊急に取り組む必要がある。主イエスが言われた「あなたがたは、人を量る量りで、自分も量り返される」ということが心に引つかかつてならない。

## 海尻で家庭集会

九月十四日(金)と二七(木)午後八時井出博彦さん宅で。 96 2534

## 南相木でも家庭集会

九月二八日(金)午後七時半から九時日向中島悦子さん宅です。どなたもどうぞ。

## 信州から野宿者支援



△募集品目△ 焼海苔(味付海苔不可)、梅干、かつおぶし、味噌

△送付先△小海キリスト教会会堂にお持ちくださるか、南牧村社協へ。

〒384-1302 南佐久郡南牧村大字海ノ口966 15南牧村社会福祉協議会気

付 山谷農場

携帯(090) 1436 6334

代表 藤田寛

\*恐れ入りますが、着払いによる送付はご遠慮ください。荷札に「木曜午後送付希望」と、お書きください。

山谷農場事務局(藤田 寛)小海町芦谷

ヒルサイドコーポ一 二号室毎週金曜・土曜はあります。電話090・1436・6334

# 人間はふたとおり



「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりにはパリサイ人で、もうひとは取税人であった。パリサイ人は、立つて心の中でこんな祈りをした。『神よ。私はほかの人々のようにゆるする者、不正な者、姦淫する者ではなく、ことにこの取税人のようではないことを感謝します。私は週に二度断食し、自分の受けるものはみな、その十分の一をささげております。』」

ところが、取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたいて言った。『神様。こんな罪人の私をあわれんでください。』ルカ福音書十八章抜粋

右は主イエスのたとえである。パリサイ派というのは、ユダヤ社会の中のみじめな宗教者集団で、戒律を重んじる生活をしており、民衆の尊敬を受けている人々だった。他

方、取税人というのはなにか。イスラエルは当時、ローマ帝国の植民地とされていたが、帝国政府は植民地から徴税をするにあたって、現地人の請負制とした。しかも、徴税を請け負った現地人は、帝国政府から給料を得るのではなく、帝国政府が要求する金額に自分がプラスアルファして税を徴収し、そのプラスアルファ分を自分のふところに入れてよいとするものだったという。

だからローマのために同胞から税を集め、しかも余分に巻き上げて私腹を肥やす取税人は、売国奴であり、かつ守銭奴であるという二つの理由で軽蔑されていた。

ところが、心の奥底までお見通しの神の前では、えてして義人（ぎじん）と罪人（つみびと）は逆転するものなのだ、主イエスはおっしゃる。立派なパリサイ人の罪は人の目にはさがしにくい。けれども、自分の敬虔な行いを誇り、人々を見下し、神の前に自らを義人と推薦して胸を張っているパリサイ人は、実は神の最もさらわれる種類の罪の中にいた。神の最もさらわれる罪とはなんだろうか。それは高慢という罪である。人を見下し私は正しい人間なので、神の赦しなどは要ら

ないという態度である。

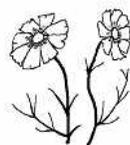
他方、取税人はどうか。彼が正しいわけではない。事実、彼は取税人は自らを恥じているとおり、カネのために良心を裏切ってしまった。彼は自分も認めるとおり、神の前に罪人なのである。ただ彼は神の前に、ゆるしを乞うた。「あわれんでください」と。主イエスは続けて言われた。「あなたたがたに言うが、この人が義と認められて罪ゆるされて家に帰りました。パリサイ人ではありませんん。」と。

結局のところ、聖なる神の前では、人間はみな罪人なのである。パスカルは言った。

「世には二種類の人間しかいない。一は、自己を罪びとだと思っている義人。他は自己を義人だと思っている罪びと。」

罪と戦ってみても決して打ち勝つことのできないというのが、私たちの現実ではないだろうか。少なくとも筆者自身は、神の前では、そういう情けない罪びとにすぎない。だから三十年前、神に白旗をかがげて、自分の罪の事実をみとめて、主イエスにある罪のゆるしをいただいて、新しい人生を始めた。今は、ただ感謝して生きている。

# 牧師さんになったお坊さん



「丸坊主にしてくれ」と妻に頼んだが、「いやよ」と言われた。「どうしてもというなら散髪屋さんに行ったら」とつれない。だが結婚以来、ずっと妻に散髪をしてもらってき、妻に散髪してもらうときは、私にとって幸せな気分するときなので、散髪屋に出かける気などしない。

なんで丸坊主か？このところ年とともに額が後退してきているので、毛根に負担の大きい長髪はやめようと思ったのである。しかし妻はサザエさんの父、波平ぶつの頭も味わいがあっていいじゃないのという。私はユル・プリンナーの方がかっこいいなあと思うのだが……。見解の相違である。

子どもの前で口論めたことなど久しくしたことがなかったが、家内を涙くませてしまったので、私の負け。帰省していた長男に、「とうさん。もし坊主頭にしてもらえたら、

『坊主になった牧師さん』という本を書けば売れるよ。」とからかわれた。実は、『牧師さんになったお坊さんの話』という本があるのである。

前置きが長くなった。『牧師さんになったお坊さんの話』は著者松岡広和氏の自伝である。松岡氏は一九六二年(昭三七)、天台宗の寺の次男として東京谷中に生まれた。氏は高校生になったころ、「自分はなぜ生まれたのか。なんで生きていかなければならないのか」と真剣に考えるようになる。哲学書を読んでもちんぷんかんぷん。そこで、兄が父親の跡を継ぐことになっていたから次男の松岡氏が僧侶になる必要はなかったのだが、真理を求めて仏僧の道に進んだ。

大学に入った松岡氏は一心不乱に仏教の本を読みふけり、また、比叡山で厳しい修行もし、大学院にも進み、実家の寺の手伝いもするようになり、お金もたまっていく。けれども、「なんで生きていかなければならないのか。」という問いに対しては答えがない。氏の心は相変わらずむなしさだけだった。そもそも仏教ではあらゆるもの

は空しく、実体はないと教える。人生というものは老いと病と死とその他の苦しみである。そもそもハゲたくない若くありたい、健康でいたい、死にたくないという愚かな欲こそ苦しみの元だ。人生はみな苦しみのだとあきらめよという。この道に生きる意味を求めても、松岡氏は何も得ることがなかった。

転機が訪れた。韓国の仏教大学に留学することになったのである。松岡氏は最初、韓国語への関心から留学を望んだのだった。しかし、なんとこの地で、氏はキリスト教会にかよい、聖書を学ぶことになった。

最初は聖書巻頭の創世記。「神はお造りになつたすべてのものをご覧になった。見よ。それは非常に良かった。」ということが胸に響いた。創造主が、「ご自分の作品である世界を見て、「おお、これはすばらしい！」と言われたというのである。すべては空しいと言われている仏典とはずいぶんちがうなと思った。もしかしたら、ここに自分の求めているものがあるのではないかと思つたそうである。その後、氏はキリストを受け入れ仏道を去って献身する。そこには生きて働かれる神、生きる喜び、意義ある人生、永遠の生命、氏の求めていた全ていやそれ以上の祝福があった。